三論繪詞

上戸　冷泉爲榮卿
下戸　櫛笥隆望卿
中戸　交野時永卿
繪　法橋元陳

津
510

福山蔵伊澤某が市の大路にて古画の写し一巻買得たり
もてかへりぬれど何乃絵とも定かならず筆者もしれねば
そがまゝにかいやり置つる程へて後に同じ街館の
我友なる村井ぬし見んとて子乃閲覧にもてまゐりしを
深くよろこび蔵めおきけるまゝにてめでたまへれけりしに
過きし頃吉沢某が閲覧ありて来し我家にて論絵詞
といへる一巻ありて文字も筆もやむごとなき人々
にて絵師は誰とはしれず詞のことにて語なし
いみじく古き紙つらなりし絵も語へまことに
妙なるものと思ひもてかの古巻としてしれぬ古画の写しとり

世々引給せられたる物語ありけるを
物語の人々あつまりて
ものがたりしかたらひ給へ
いつの世にいかなる業よりかかるひとあひて
一巻となりつるにかぐ〳〵奇遇よりあらさんや
相逢はもとめつる所業卿の序文を
ものしたまへり

法橋玄老人

法化下未者

この序文は三論の末毎に付て特に後川法眼の筆巻の中にあり此を論毎の末に載せて書きをくなり

三論繪詞御巻物筆者

序文　冷泉侍從三位為榮卿　上戸作者 造酒正長持

上戸　同

下戸　櫛笥右衛門督隆望卿　下戸作者 飯室律師好飯

中戸　文野大藏卿時永卿　中戸作者 中右衛門大夫仲成

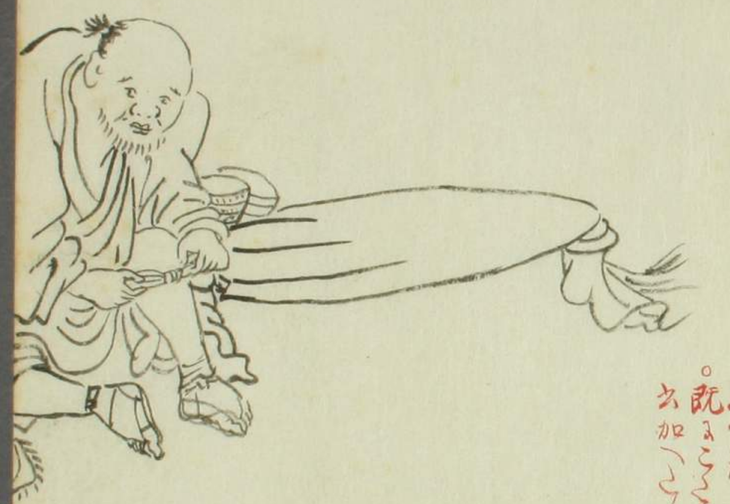
外題　鷹司右大臣輔平公

箱銘　八條少將隆輔朝臣

繪　吉田法橋元陳

為業卿の序

抜き我君の代を治め民戒ひとしくまたも
漢家の明王聖主のむかしはもとより和れば
なぶ〳〵なる
あさの汁孝行の近来天竺唐土にいたるまで
ろ〳〵師恵のうゝこきまはり民乃竈も張ひ和れば
を含まぬなの面〳〵樂しく栄えて〳〵を孫こびの
〳〵耳ゝさてゝ〳〵ざる代このほど三人のとゝこの〳〵寿金て
各心の気〳〵まゝ世〳〵あ〳〵そふ一人の男ハ造酒正糟
屋朝臣長持とて酒を飲る大上戸こひとりの僧ゝ
飯室律師好飯とて小づけをぬむ最下戸こひとりの老の
こハ中尼衛門大夫中原仲成とて酒もこづけもぬむ中たん
いつまもうれもとり〳〵と詞をつくして寿をとく後乃

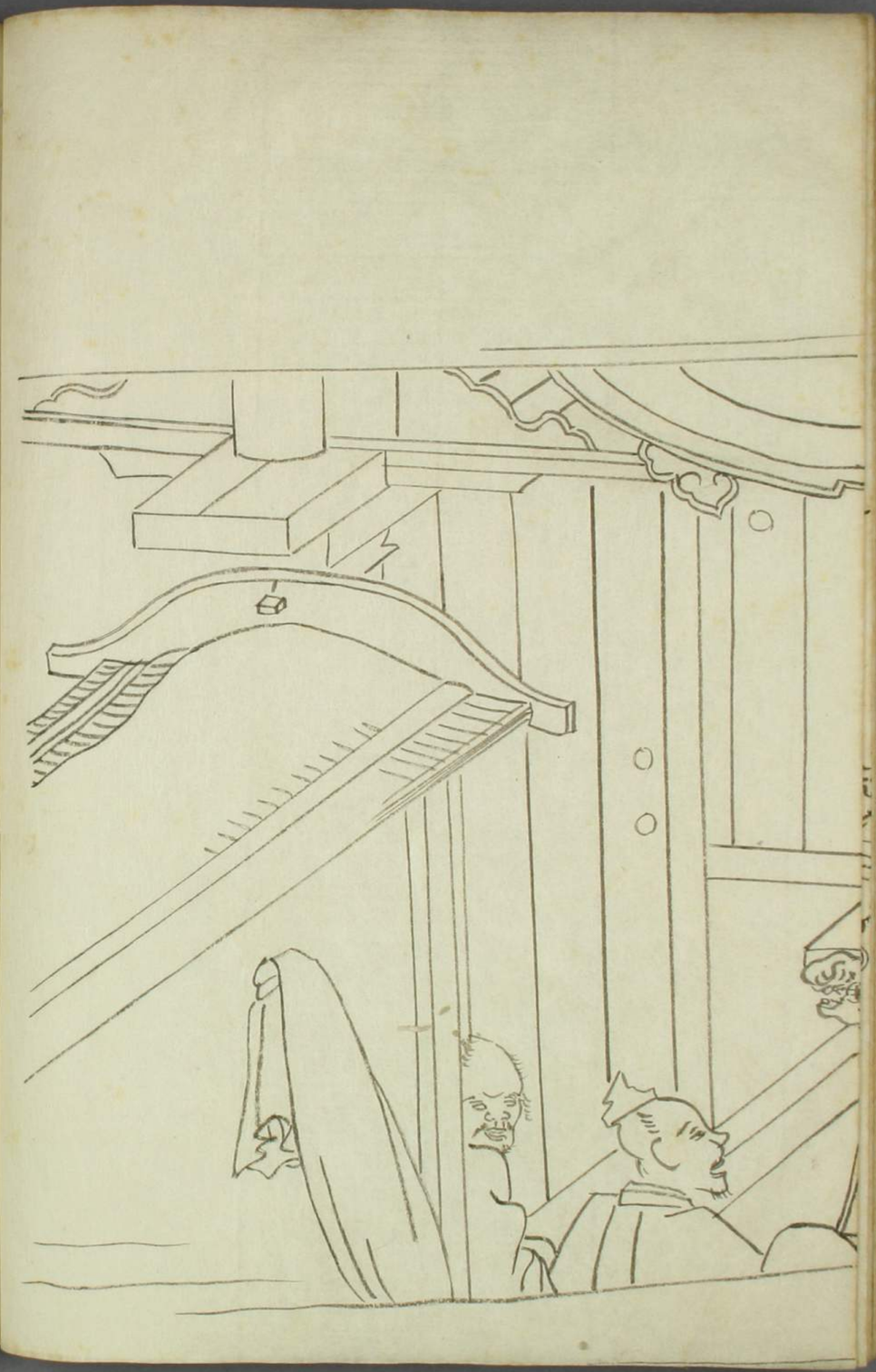


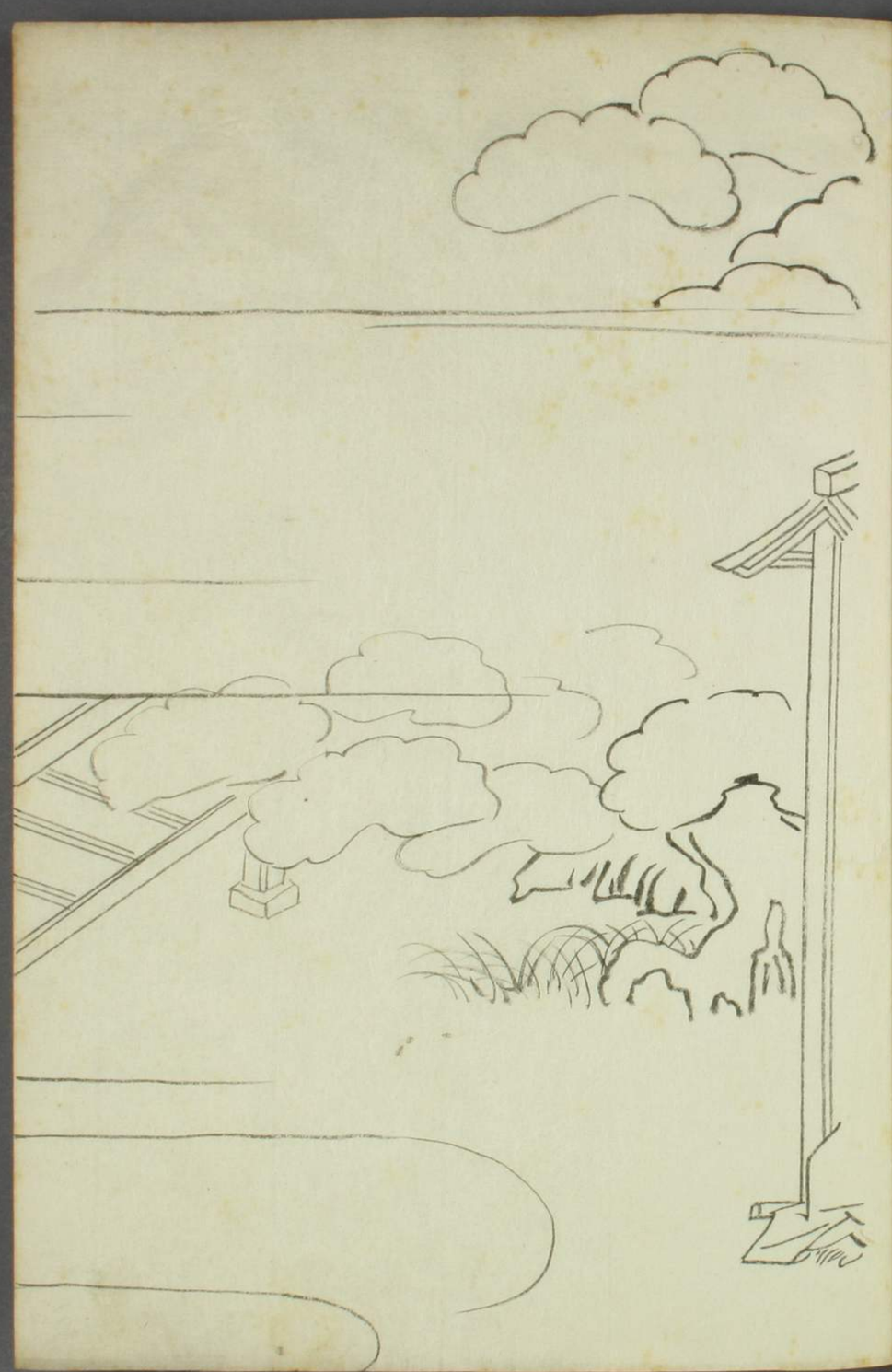
せまでもあまひこれ有ゝ〳〵まなり

この寿こせまでこそあるべけれ
今年一名又の奇遇あり
なりあふるもあべんり
既ふるこひとり会られハ為あて
出加〳〵とゝ

あさ〳〵しハ皆〳〵
俗ゝあつたらあ
新とハ呉ぐ

供借の神事へ





三人の
章論

飯
米

上戸

（為栄卿の文）

酒所長持中やう

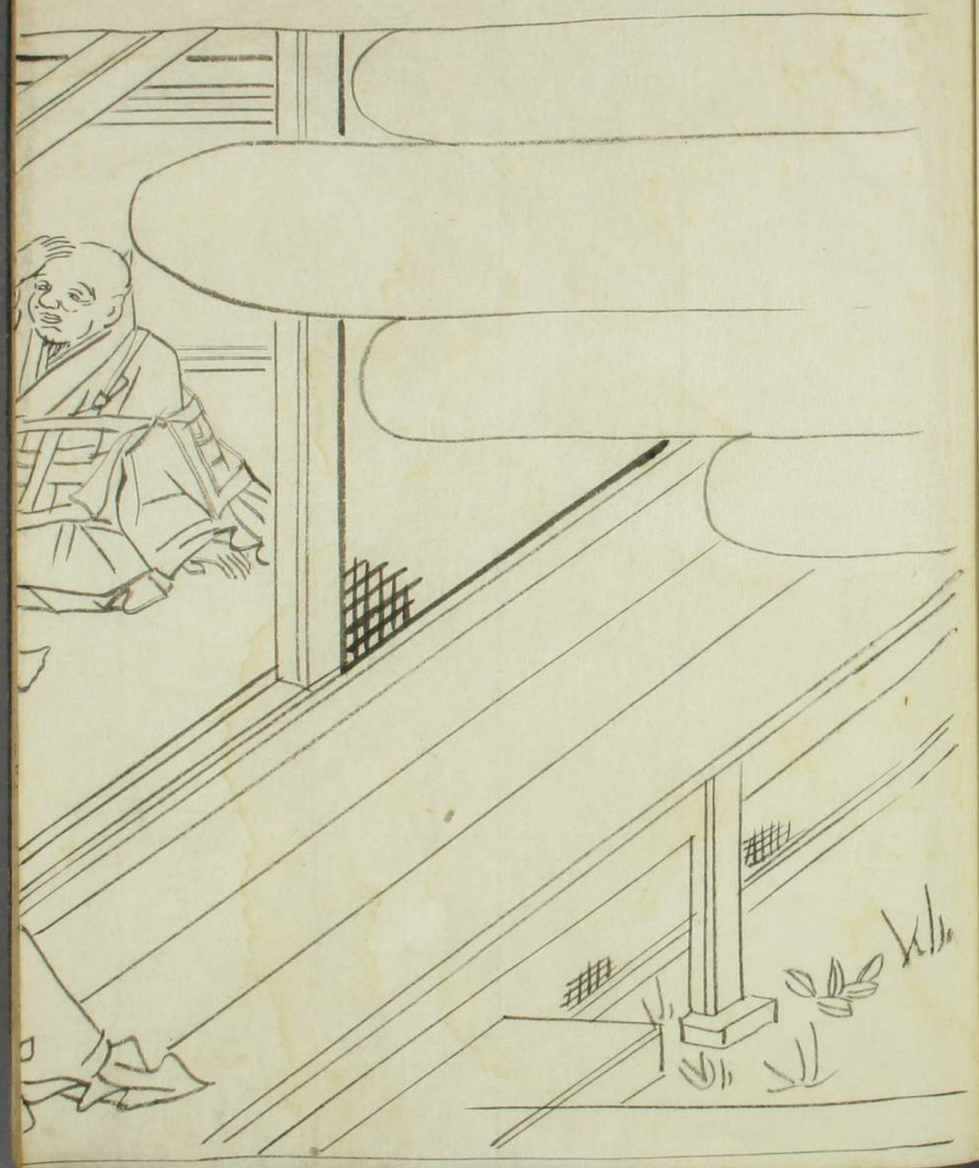
酒乃いとゞきてのハ皆むかしも今もかはらぬ酒をこのゝて
のむ人ハむかしハ封戸もまゝき後の世までもうけつ
ゝけるなりとかゝるひしり人もあり仏を愛せ一樂天も酒地
のめりて詩よつくる事なりとかゝ情ゝ詩の席ハ三百首
とそあつめたる梅花の乃もとのさうまハ天さへ恋ゝる
ゝしき人ハ花乃下にてあくめたる梅乃芳香乃風
林間ハ酒をゝのめりてあるかさくもいとをさ子
菜の巷のもゝとめよい屠蘇ハ日散をのこぬ迄ハ七後づの
春の命成ゆゝゝて一里の中ハやまひなゝもべて

酒ハ百薬乃長として醫師も道のしるき道ハ茶乃
祝ひにも酒をもりてそさきとなし元服するにも婚礼諸事
の會むこどりよめどりい皆まつり備盾の祝あまいた
るまでも酒なくていかゞせん中にも曲水宴の宴あ
會ごとに扣て酒しあるひハかゝる鸚鵡盃式ハ
あつれの濫觴も皆酉のむかしぞかし世説の中の例にも
光さしそむ道ハむかしこそ世を以ハ酒れ源氏の生と
こまかなもしかもつきことぞこれ始そめたる禊衣の大将
二宮にさしつゞきてくてこそまつる神ゝ人をつくし
しまもうしおもりさしつゞきおしつてもあれどぬれぬも

うきつけてもちのあるごとぞ酒しれるされハちの世乃菜
花にハ師よ色ある梅をは地氷露後やさしきもさ
ひとにもにこそ奥ハあれ雪月花をあそんでも酒乃あま
まハ無もあしされハ天神地祇まで酒神供なるとぞ
つし人に近づく徳もあり我身をさかゆる功もあり代
のあまる道も酒をいへは美物何りとても氣味なかる
料理まで酒をあれもてなひもあし下戸のまれ人
えるるもそ胡も心も外の氣ハそれ會釈なけなる所
もしひ実法ひもうほうつきハもるひあれんとしるま
へどもまがこそこそハ見え見えてこれ酔あり後ハさるねぞ

たましのそこハひさかるうはつぼつきてひさ紙
さてあるにも行らぬ事しきりなきて又まゐらするさこの
無こそ見ぐるしきまゝでうせられ上戸のくるしね
お語しきゝ人めをはゞかりて売のバりはあらばれ上戸の好む
をこゝろえいやしきひざをくみこその盃ときらめかして三段
もみ夜もねぬればあくびも添て大茶碗是ぬり縁ぬり
赤うるしぬりざと作りの大茶子呂かりよ始めて売あ
ののしあれのこ一口のこゝ初音ハまだ白ふ有る梅むすびのみ
いとやさし秋も末の菜おれてゝ露なしこもり
一文字ぐらしだらしなしれもりかづきそバざしひざし

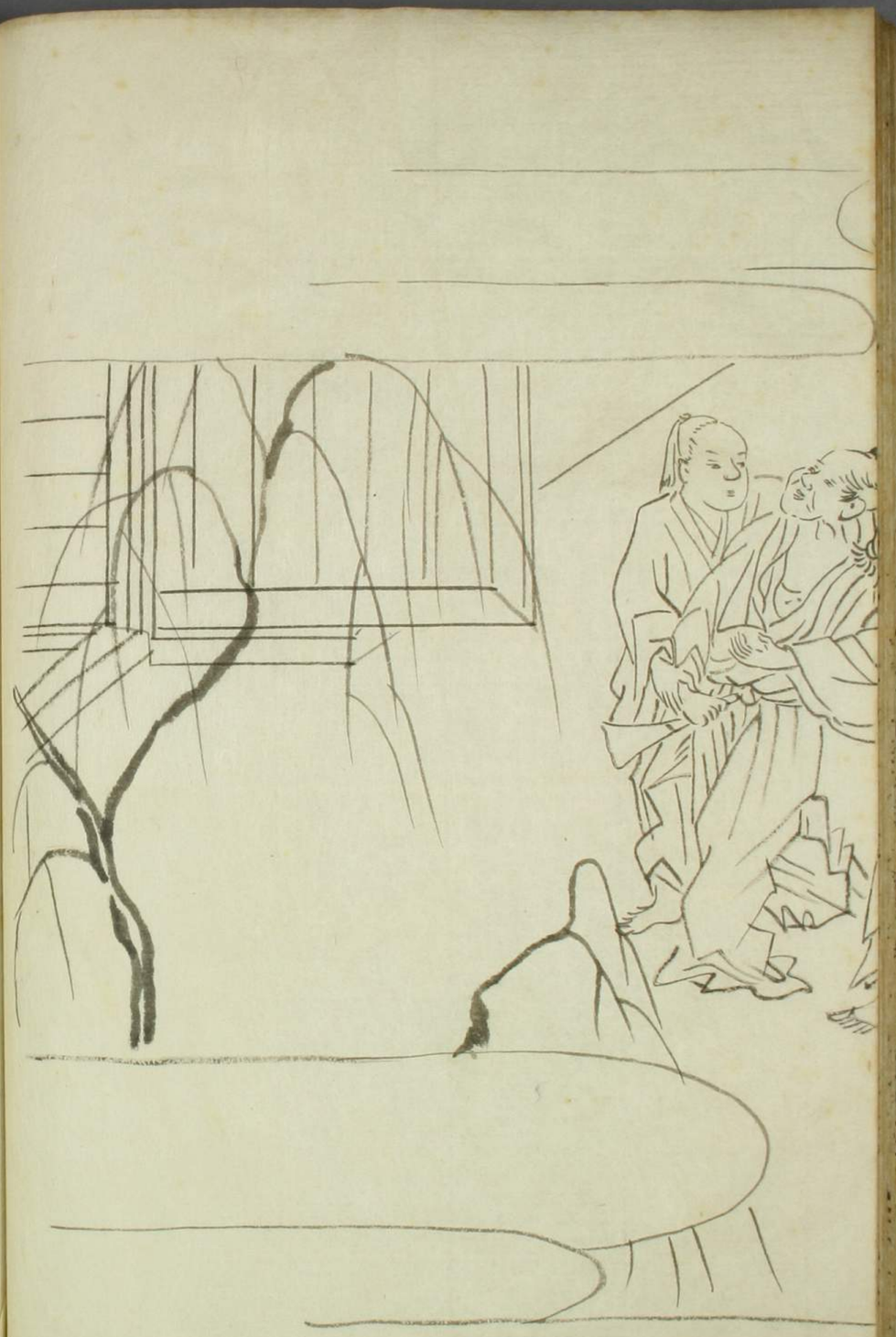
ちゞくざしゑひそうけるの思ひざしおくいざこの加た
いろしよ相手に梅や月もの引出物筝弦乱舞白拍子
立まひ居まひあつま舞今様小歌売りて荻節楽
催する楽を弱と猿楽相まね仕舞しよこハ様をかね
見きちゃうつきつまねするそなきの事をわれいか
有る歓乃ある時も心なし親折節も百忘れて心
やうちの中にこそハ楽そさされましてよ給こひ行哉
味ハ努酒とて酒を呑その内上戸ハ酒をまよひつ
世ま面思計しとや世とも生きつきこの貧福ハ下戸
のたてしたる菜もなし夏六月の暑きにも一盃持走



その言きかもほとけ　ものもはも　極楽のこと
ばを聖　ゝるこゝろ　ひ多階　ゝれとも　酒ゝ　ひとそ
聞きされぬ　もとらと　釋ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
釋　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

南無阿弥陀佛　南無阿弥陀佛
長松ゝ新酒も　古酒も　釋ぬれハ　念佛　高　をそ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

大酒の肴



下戸

（隆夏卿の文）

飯室律師好飯ゝ

上戸の徒をあゝもしゝ下戸ハ和ゝとそれともも
飲とのまぬとゝ云ふ上戸のとゝそつゝけぬる先ハ
佛の御法ゝも五戒の中ハ不飲酒戒なゝ云ふ
のゝもせぬいつゝもの内々乃典籍ゝ酒をのゝとゝ
とる漢乃高祖ハ盃をそゝ項羽ゝもとゝれぬ
殷紂のこゝひゝ乃ゝ酒乃泉の故とゝし長安倡家の
もゝのゝ琵琶の秘曲も忘れゝ酒ゆゑ
すてゝゝ伶氏の須磨ゝ流されゝ酒を飲
ハ勝月夜のわゝの君醉さゝもゝそ逢ゝ

成大納言の和の吉正月一日の二引おお梅酔くるひ字そそ
夜いそし人々よ事川方便よ表てむ方酒てむそ郷し
きさても上戸乃御まへしをハんハてもやまぬ悔数ま
多く外并穀人々さてかし酒よつくるそつひへなる酒や
ことにふとよかくに意紀のりのそて後ハ文臨直を世む
る折ふにまうしたちいくるそいともなまきさうそなしそ
おのつからのまぬ日数も過ぬれハあきさなきなり
河ぞれさハ妻子乃別よ及ふ段そほろ酔ある時ハ
又家乃中よハいりさんりんよあひてハひかこ川て
きね云くり云ねたりことと目やら顔やら姿やら現

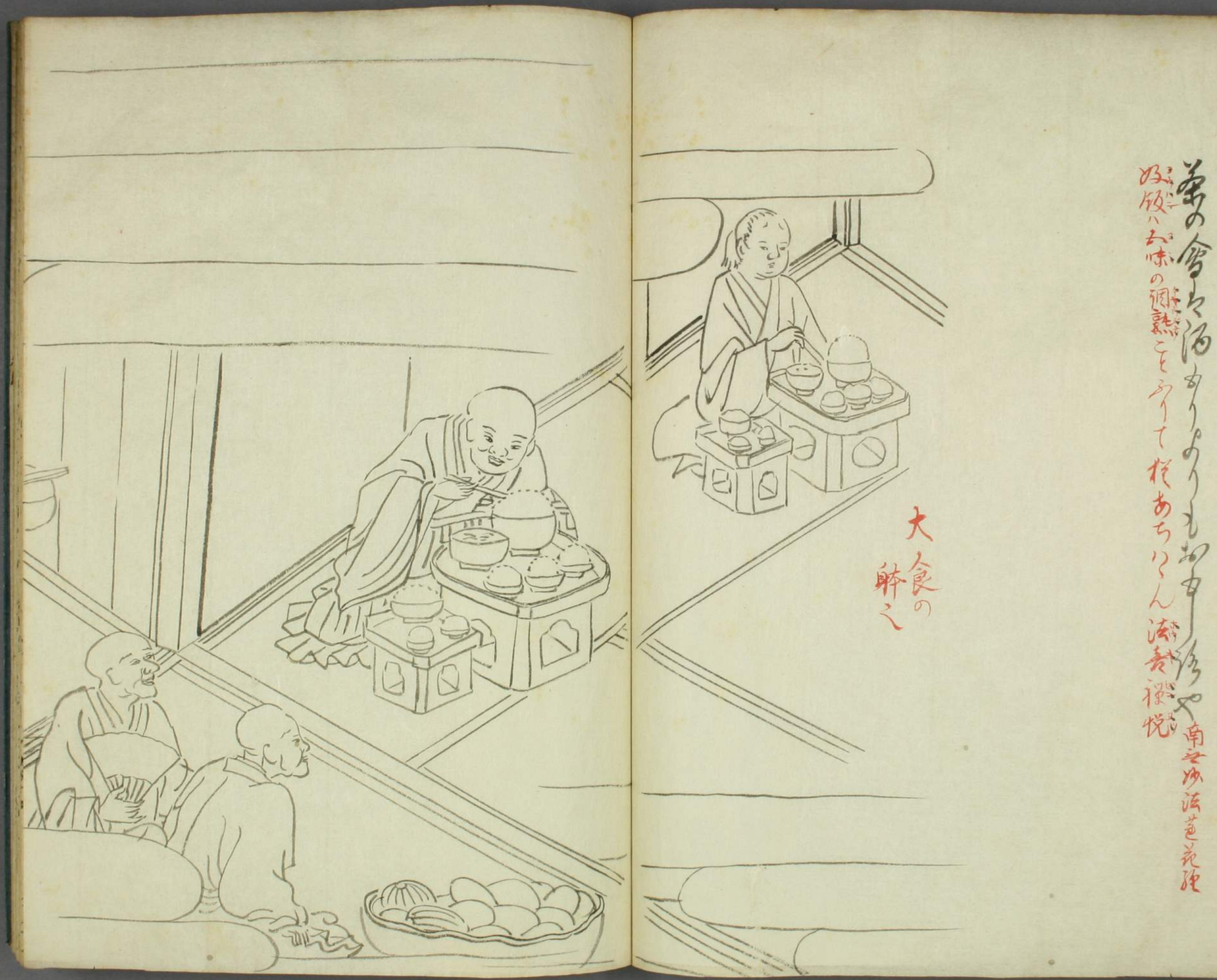
おけなる顔つきハいふもさらなりこそおのりなれ旋りて上戸
れ今もとしてと猶ほひしあるきつつ堀江かまやる旅
入てまはま同異見まてかりれおくよこしつつにら
さらひさるなしきてそまくさるよ返しきれおなれさて
又馬輿車まてのりもたまふ段おちこ綴ひ従者生悲
うちそ肉出やらなる赤き上戸の顔附なる鉄乃ちた人にてそ
おほえくれ共かし赤との鼻白ハおまて形ある似たり
ゆるのむとハちくそえもなく喜見さらるも共其郷し
やさまそら法まりてこりま附お顔まくハらりにかしと
大道戯ひくへつのむとハまさと人と世れさへのおまし

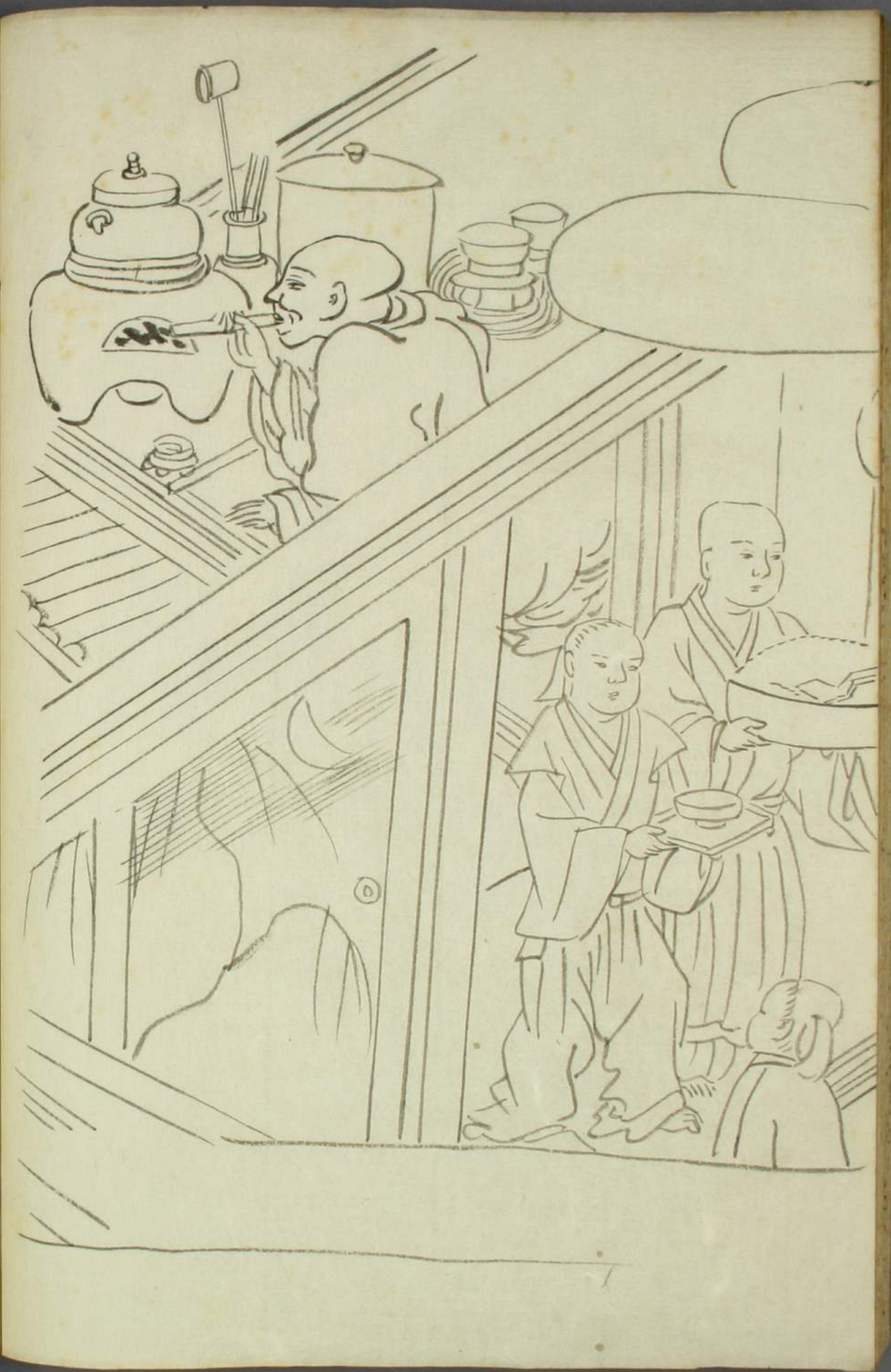
ア[illegible]ふつきゝれ[illegible]ことひとてあることれいあるもかく
きぬんそ[illegible]ある上たのは乃者ハ[illegible]あまくさ[illegible]
ら[illegible]れきこなさこ[illegible]その鼻[illegible]
ゝやかゝて辭ゐる有様ハ万の人よりあきれてと
りれ[illegible]ゐるのこゝ[illegible]ひとこれ[illegible]
こる事もあり[illegible]ゐ[illegible]人を害[illegible]
るもの[illegible]前後も[illegible]辭[illegible]れて命をこしのふる
[illegible]時ハ又是よりさてゝにあんたそ[illegible]
ゝよ鼻[illegible]ゐ[illegible]人乃面[illegible]ゐ[illegible]新き[illegible]
あつまりて水薬あハゝ[illegible]根つきたほ[illegible]のま

せよとあるそさるとも濃まゝやさて又辭乃さのまゝよ
しるとゝもたゝ[illegible]二日の辭ゐる[illegible]ゐ[illegible]
ゐれかゝるあゝ[illegible]日思ふよも[illegible]ゐ[illegible]
こゝもゝ[illegible]ゝ[illegible]先ハ[illegible]
元後ゐ[illegible]
大臣の大答ゐ[illegible]ハ[illegible]
本三[illegible]飯後飯[illegible]
きゝの[illegible]御料玉[illegible]
為ゝ[illegible]女[illegible]
[illegible]

御料もめつらしや世だわしん乃子飯ハ六道能ちく
れのむしく四季折々しの生跡ハ今こそれかむかめつ
かのゝ子松茸新たけ加あらきあつしるこ干しるひや
しつけ調法あ母さるまとめつゝ雨し新入のま
こつけよき結しらね小さいさし御まへてまゐらせてみ
ゆしきや気しぬ上たやねましまゐらせ後まちひ
身にも衆生も始の菩薩まちこゝこの母子餅子
つかりわにいそいそかりぬ久まふまちひ千代
よ程若きいのうるに煩悩のきつなもかまちひ菩提
まてまむたゆりあり命ハ水のあハれちひ世のあさ

あるもさつれあり台の粽まハ屈原かむかし思ひあ
多非始乃税まハ為のことあつるかいまちひ秋の祭
こハ何しねとれ紀家ちくいとやにし青陽乃
春のものあまハ元紀綿きおしあつてとし史記の
税まハ八幡乃かけさしやしるる神社つるれの出祭
も壇供のおちひまゐらせてこそ修正の行ひあつときけ
さてあましろき遊ひまハ本北十張つさいれね出し
百ふく器儀ひちんこさき名目ちしまつゝ兼らし
せんらしまんほとさき無上のふつほとひき入てかしね
こゝ梅つくりあさ旬しのあ梅あ恵あしくさつらて遊ぬ


菊の會に酒もりよりも茶もの事
好飯ハ味の調熟を守りて花あちらん滋養徳悦
南無妙法蓮華経
大食の躰こ



中戸

（時永々の文）

中尼濃つ大文仲成ゆゑ

三戸もてかもさ申しよりて徒あるときこのれ宮世

百出世てあるそ〳〵て中戸なるるあそなれあま

りのまあ也無もあ〳〵さ申てるのもおもあひあ〳〵し

されい年紙のいそひあも殊文二度のおそう〳〵し

世るこ〳〵まの申大上戸ゆ〳〵きくさ社殊こ

さそ文殊愛の無あるもつ戸のこちつきあき申や

大食上戸のちあつ〳〵芳も今も何〳〵よや仏の

き〳〵（信）信へし元文のこるあもちゆ〳〵て乃

世の栄ひも刻けて〳〵薄の減もそ分れ特戒乃

中まもおのつ〳〵あいさ申とを申せそ一度そし

却り人をそそ一向断酒乃ひ申ようまきり〳〵当

く覚元け申されい中戸の酒るまひい飯をも酒

殊ひよき程〳〵志有〳〵てのこ〳〵ひて一親い

かそそそあるを乃百れ祝ひ越ひあも酒のあき

まを無ル年呪師志年玉のく〳〵ぬまそ酒をのま

ぬい志下けこそまふ田の〳〵ちつのこもちひさ

るく成そいうひも有〳〵夜乃ゆつそあなまる

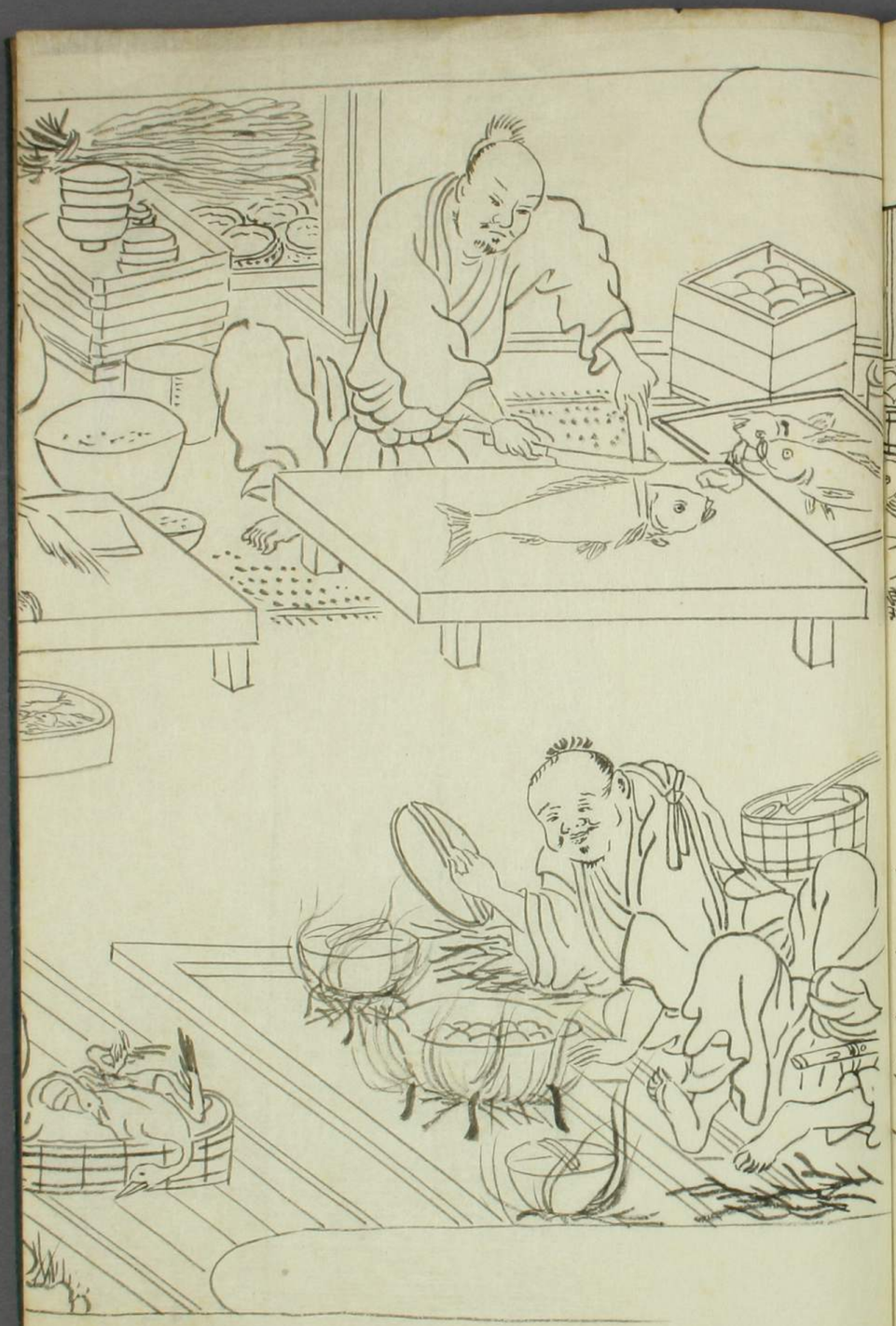
有酒一度い氣力ゆ〳〵無れ宮こそこ元申

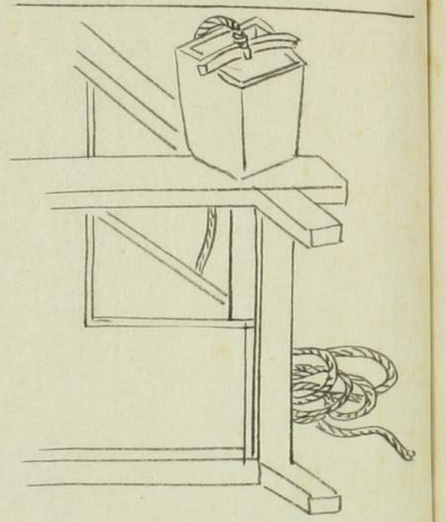
たてまつる人の男などの酒のめるにそなへつ
の日食前食中食後まで、ときほとゝぎの少量
ゆゝしまりせて、つゝしむ日は酒と薬とを共にたてまつる食す
きものもあるべし。酒のたくるもいとよろしかれ
ども、ものもてるゆゝしき日は、酒量に應じ
ものもの種類は、智者学識のうゝ神や仏の利生を
ときあらはすこゝ術なれ人の貴神考へて初中後年
の習ふも中年より知るべきものなり。ときひの所ともも
さこゝにけり。老人ともあそばしやもつまの申る
つまるゝあらるゝのうゝきいとけなし十七八九の程

こゝは、藏より出ずるもの程なれや。必つゝも用ゐるべきも
ものもとりゝ。西種なるもをこうまゝ中なる
人は世に長生なるは、なほ長生なるべ人
も見るゝしや。又世なるも又貧さしてはのる
きも見るゝしや。なほ世のこさゝひ
ちりゝと何るこゝろのひつまゝ〳〵そなほえん
なる四季折節の月も星くさもきも見へるや
花と秋は世界なるもたゝうるや
いとゝなこゝよりの初めゝ小独あるもの
るも見るゝの世はあるべ世のゝゝひを思ふ
あやゝあるべ有ゝるも水

生母枝をなりきぬ風のあ土くれをやらぬ何のあ
旬
免れ堯舜の代のつゝしさい民の竈も張ひぬされ
ハ石こる紀氏をこらる天皇代久の政行よき
程とこそきせひすれそ中そよきものハ
細橋あり乃仲ゝ石船乃帆柱をつてよき
手をこる中人乃小馬よのうきへあらうて中納
言の中将ハ右へての人の子ゝ皮中幣卿乃さし
や上藺下藺乃間ゝも中扇のそこにあるゝ氏
即ち成仲うゝしがハ氏南之三宝南之三宝
世の中ゝ位仲成ゝ石中ゝ中道の理をきゝうゝ

飲食
等しき
神く





吉田法橋の繪

多く酒のむ人を上戸とも大戸ともいひのまぬ
人を下戸とも小戸ともいひし事古き物に
見えたれど酒のみに限るべからず類にいはゞ以
飲食多者為大戸小者為小戸と傳れは酒
のまずとも食の多きは皆上戸へ大戸へまさ
田令の集解に一戸之内八丁以上為大戸
六丁為上戸四丁為中戸二丁為下戸一丁
不在計限也これは一家の事にて戸令の義解
に謂戸一家為一戸也と伝して別の事也

南畝伺候老翁

あらゝ諦の條と詞とは一くさひとつなれて
年頃よき頃文よりあふ時や来
なくんひさしくなりてをそれなきに
よしはなし文すも記しおのれ我
抄きしものゝきこえたる人をよく
小松室のみたまひおもひもなく
家さしめ給ひて所望によるさえ
給ふるよしを文の志りへるあつく
へくのさまてるまるなし

于時庚戌二月
四十二翁 [illegible]